

環境と観光

——イギリス湖水地方の事例研究

Environment and Tourism : A Case Study of the Lake District in Britain

今村 隆 男

Takao IMAMURA

2007年10月4日受理

1

イングランドの北西部に位置する湖水地方(The Lake District)は、観光地として250年もの歴史を持ち、現在では年間1500万人(推定)もの観光客が集まって来る地域である。その約95%を占めるのは国内の観光客であるが、観光客の草創期から国内の観光客に湖水地方の人気が高かった理由の一つは、この地がイギリス人が理想とする「安らぎと静けさ(peace and tranquility)」を見出せる田園地帯、いわゆるカントリーサイド(countryside)の典型例であるからである。¹都市部ではなくカントリーサイドがイギリス人にとって理想的な場所と近代になって考えられるようになったことは、詩人クーパー(William Cowper)の代表作『課題』(*The Task*)の中の「田園は神が造った。町は人間が造った。(God made the country, and man made the town. 1749)」という有名な一節に現れている。この作品が書かれた1785年は産業革命の始まりによって都市部の環境が劣悪化し、田園に住まうことが理想とされ始めた時期であるが、それはちょうど、それまで辺境の地として全く注目されなかった湖水地方へ余裕のできた人々がこぞって訪れ始めた頃に重なる。また、20世紀にはいると湖水地方には世界中からの観光客も集まるようになってゆくが、今日の観光客にとってこの地が観光地として大きな魅力を持っている最大の理由は、ナショナル・トラストが設立された19世紀末以降、国内初の国立公園に指定された20世紀半ばを経て現在に至るまで、湖水地方が環境保護活動の先導的役割を担ってきた観光地であるからと言ってよいだろう。今日では、湖水地方は環境を保護することが観光客を招くことに繋がっているとまで言える観光地になっている。

湖水地方のカントリーサイドの風景は、この100年余りの熱心な環境保護活動によって維持されてきたものであるが、それではこの地域はどのような経緯で環境保護活動の先駆的な場所となったのであろうか。世界で初めて産業革命の始まったイギリスは、当然のことながら自然破壊も世界に先駆けて起こった国であった。そして、そのイギリスにおいて環境保護の理念の確立と実践の展開が産業革命の進行とはほぼ併行して進んで

いったのは、ある意味で必然的な成り行きであったと言える。環境保護の理念と実践がどのように展開していったのかを考察する際に湖水地方の事例の研究が適切であるのは、この地が18世紀以降、鉱山開発や森林伐採だけではなく、観光公害の「先進地」の一つであっただけでなく、それゆえにこそ、開発への反動も極めて大きい地域であったからである。

2

湖水地方は、氷河期に形成された、イギリス国内では他にはあまり例を見ない地形をその特徴としている。即ち、約1万年前までの氷河期に氷河の侵食によって削られた湖や谷が、フィンランドのフィヨルドで見られるのと同類の多様な風景美を形成したのであるが、これが現在の地形の基盤となっている。今日では、自然景観だけではなく、その動植物のエコロジカルな多様さにおいても、国内では稀な地域である(Ratcliff 12)。自然への恐怖心が薄れた18世紀後半、富裕層の拡大や道路事情の改良、海外の政情不安などの諸事情に後押しされて、人々は風景美を求めてイギリス国内のマージナルな土地を目指して旅をし始めたが、その中で最も人気のあった目的地の一つがこの湖水地方であった。²

風景美と静かな環境を求めての湖水地方観光は、トマス・クック(Thomas Cook)らによってマス・観光の始まった19世紀半ばからの第二の隆盛期を経て、20世紀以降になるとワーズワス(William Wordsworth)を中心にしたロマン派の湖畔詩人達、ラスキン(John Ruskin)やベアトリクス・ポター(Beatrix Potter)といった著名な文人との結びつきが、この地の知名度をさらに増し、観光客のさらなる増加を招くことになってゆく。今日、湖水地方は、ロンドンから列車で4時間、エディンバラやマンチェスターからは2時間余りという大都市からの適度な距離もあって、夏季を中心にしながらも1年中、観光客が絶えることはない。地域の人口の約三分の一は何らかの形で観光産業に関わっている、世界的な一大観光地となっている。

観光地としての湖水地方の決定的なアピール・ポイント

ントは、地域全体が先導的な「環境保護区域」になってきたということであるが、我々日本人も強く惹かれる、点在する湖の周りに緑の丘陵の広がる湖水地方の典型的な風景は、すでに人間の手の過度に入ってしまった自然風景であるという面も見逃してはならない。それでは、ここに至る環境破壊と保全の歴史はどのようなプロセスを辿ってきたのか。湖水地方へのツーリズムは、最初の段階から自然の風景美を楽しむためのものであったが、それゆえにこそツーリスト達は風景の変化に敏感であった。ツーリストや在住者たちが書いた18世紀以降の旅行記やガイドブック、農林業報告書などの文献を読めば、産業革命の初期の時期から景観破壊を始めとした環境破壊が進行し、その後、自然保護の視点が19世紀始めに早くも登場し、その理念を実践する組織が19世紀後半以降、次々と誕生していったことが明らかになる。³

3

まず、18世紀から始まった湖水地方における環境破壊の具体的内容を整理しておきたい。その主なものは、鉱山などの開発、森林伐採とそれに付随した無秩序な植林、別荘開発や鉄道敷設などがもたらした観光公害の3点にまとめることができる。

1) 鉱山開発など

湖水地方には、イギリス国内で認められる鉱物、約600種のうちの半分が産出されるという(Ratcliff 27)。湖水地方の鉱山はこの50年間で殆ど閉山しているが、その歴史は鉛や銀を掘っていた古代ローマ時代に遡れるほど古く、鉱山開発がピークであった18-19世紀には、黒鉛、鉄、銅、石炭など、数多くの鉱山が稼動していた。この他、湖水地方各地でスレートなどの石材の切り出しが行われていた。そのため、当然のことながら鉱山などの開発は周囲の環境に多くの公害や人害を引き起こした。しかしながら、初期のツーリズム隆盛期の旅行記は、鉱山の引き起こす問題には鈍感で、環境破壊の視点からの批判は少なく、中には産出される鉱物の美しさを賞賛するものも少なくない。このことは、風景美を楽しむための観光においても、経済優先の感覚が未だ強かったことを物語っていると思われる。なお、鉱物の積み出しのために使われていた鉄道の中には、閉山後の今日、観光のために転用されているものもある。

2) 森林伐採と植林

湖水地方の森林の歴史は氷河期の終わりごろの1万年あまり前まで遡れる。最初に登場した木は樺とビャクシンで、その後、スコットランド松が加わり、温暖化と共に、オーク、ハンノキなどの広葉樹が大きな森を形成していった(Ratcliff 111-2)。約5千年前に人間

がこの地に定住して以来、自然林は人間の進歩の障害として開墾が続けられていったが、産業革命の始まった18世紀になって加速度が増す。⁴一方で、17世紀後半から本格的な植林政策が国をあげて行われ始めた。この結果、現在、湖水地方では純粋な自然林はまれであり、わずかに残っているものの多くもsemi-naturalな森でしかない。18世紀の森林伐採の主な目的は、鉱物の精錬用の木炭生産のためであった。木炭を作るにはその6倍の木材が必要とされ、18世紀のうちに湖水地方の中では木材を調達できなくなり、スコットランドのハイランドに頼ることになったようである。木材不足を補うため、1780頃まではスコットランド樅(Fir)、それ以降は落葉松(Larch)が大量に植林されたが、これら成長の早い針葉樹はいずれも湖水地方の固有種ではなく、グリーン(William Green)やワーズワスらによる景観の調和の視点からの猛反発を招くことになる。この他、南部では隣接する工業都市ランカスターの織物産業に向けたポピンを供給するために大量の木々が伐採されるなどし、湖水地方の森林率は5%程度にまで激減した。20世紀にはいって、1920、30年代には大規模な落葉松以外の外来種の針葉樹の植林が行われたが、再び景観破壊の視点からの反対運動が起こり、それ以降、湖水地方の中心部では規模の大きな植林は行わないというForestry Commissionを中心にした合意ができることになる。現在の湖水地方の森林率は12%で、イギリス全体とほぼ同じである。

3) 観光公害

初期の観光公害の代表的なものは、別荘開発による自然景観の変更である。18世紀半ばに始まったツーリズムの初期の段階から、ツーリストの中でも裕福なものの中から土地を購入して別荘を建てるものが現れ、ウィンダーミア湖などの主要な湖を見渡せる丘陵や、湖の中にある島が私有地化されていった。そこでは、自然林の伐採や装飾のための外来種の植林が行われた。⁵19世紀になって蒸気機関車の全盛時代はいると、産業革命の影響でいくらかのゆとりのできた労働者階級の娯楽のために、湖水地方内部へ鉄道を敷く計画が持ち上がった。⁶この時、桂冠詩人となっていたワーズワスは、多くのツーリストの流入は地域の平安を乱すことになるという理由から、1844年、二度に渡ってモーニング・ポスト(Morning Post)紙に意見広告を出すなどして激しく反対した。しかし、この反対運動は実らず、鉄道開通はマス・ツーリズムの開始時期と重なり、湖水地方へのツーリストは10倍にもなっていて、終着駅周辺の乱開発を招く。20世紀におけるさらなるツーリズム隆盛は、今日、我々が知るところの様々な観光公害を引き起こしてゆく。

4

ワーズワスによる鉄道敷設反対運動は目的を達成しなかったとはいえ、その抗議文は彼の書いたガイドブックに載せられ、広く読まれて次世代に影響してゆくのであるが、この他にも18世紀からの「風景」をテーマとして書かれたトラヴェル・ライティングなどの文献資料の中には、環境問題への様々な反応を読み取ることができる。

初期の湖水地方旅行記の中で広く読まれたものは、有名な詩人グレイ(Thomas Gray)によって書かれたジャーナル(日記)であるが、これは景観の変化に言及している最初のものとして注目に値する。1769年の湖水地方周遊の旅の中で、グレイは行く先々でオークなどの自然林の伐採やスコットランド樅の大規模な植林に注目し、森林風景の変化を敏感に感じ取っている。一例を挙げると、のちにナショナル・トラストが買い取って保護することになるダーヴェント湖岸のクロー・パークでは、“Walk'd to Crow-park, now a rough pasture, once a glade of ancient oaks, whose large roots still remain on the ground, but nothing has sprung from it.” (Gray 59)と述べ、昔からのオークの森が悉く伐採されて切り株だけが残ったでこぼこの草地になってしまっているのを嘆いている。この他にも、あちこちで地主が領地内の木々を伐採して売り払ってゆく様子をグレイは非難しているが、そこには当時、需要から木材が高く売れたという背景がある。

続く1770年代の『ウェストモアランド・カンバーランド湖水紀行』(An Excursion to the Lakes, in Westmoreland and Cumberland, August 1773, 1774)の中で興味深いのは、湖に浮かぶ二つの小島の描写である。作者のハチンソン(William Hutchinson)は、ダーヴェント湖の小島(Vicar's Island)について、最初の訪問時に青々とした西洋楓が離れ屋を覆っている風景の美しさを描いているが、次に訪れた時には別荘地として買い取った新しい所有者の「強欲」(avarice)のせいで木々が切り倒されて「美が損なわれた」と嘆く。ウィンダーミア湖の中の最大のベル島(Belle Isle)については、ここにもまた別荘を新しく建てた人物によって、伐採された固有種の木々の代わりに「整然と並べられた醜い樅の木の列」が植林され、「オランダの市長の宮殿」のような極めて趣味の悪い建物が作られて全体の景観が台無しにされている模様を、その所有者名を明記しながら、

The few natural beauties of this island are wounded and distorted by some ugly rows of firs set in right lines, and by the works now carrying on by Mr English, the proprietor, who is lying out gardens on a square plan,

building fruit walls, and preparing to erect a mansion-house. —The want of taste is a misfortune too often attending the architect.... (Hutchinson 187-8)

と非難し、この眺めは「あまりにも眼に不快なもので、ツーリスト達は嫌悪感から背を向ける」(Hutchinson 188)とまで言って、自然の景観に人間の手を入れることに自然保護的な観点から早くも反対している。

19世紀にはいると、このベル島の別荘の建築物の色について、景観論の視点から批判するものが現れる。グリーンは『ツーリストのための新湖水地方案内』(The Tourist's New Guide, 1819)で、この建物の白い色彩に難色を示して、“The present house is of a tone somewhat too dingy.... A tint appropriate to such a house, or to any other in a mountainous district, ought to be a mixture of all the colours of the neighbouring rocks and stones.” (Green 1217)と述べ、「山々、森、岩」など周囲の自然と調和する「近隣の石材」を使って作った建物の方が望ましいと主張するが(Green 1216)、これは現在の国立公園の方針と重なるものである。

またグリーンは、湖水地方全体において森林が「容赦ない斧」によって大規模に伐採されている様子を嘆き、利益重視のためその後外来種の木が植林されている現状を激しく批判するが、その批判の矛先が特に向けられるのは落葉松である。その主たる理由は大規模な植林による景観破壊で、落葉松の木の鋭く尖った頂部は“spike heads”とでも呼べ、周囲の在来種の“vivid green”とは似ても似つかないその煤けた黒色は“grievous eye-sores”(1221, 439, 264)だとまで言う。グリーンは、植物(主として木)を「在来の」(グリーンの表現では“native”, “aborigine”)樺やトネリコ、オーク、スズカケなどと、「外来の」(“exotic”, “foreign”, “heterogeneous”)落葉松や樅を明確に区別している。「固有種の中で最も美しい」樺の木を『湖水地方案内』(Guide to the Lakes)の中で賞賛するワーズワスと共に、彼らの意見は科学的にも正しいと言える。

1835年に決定版(第5版)が出たその『湖水地方案内』は、木々や建築物の景観論においてグリーンに強く影響されたものであると言えるが、景観の調和論からさらに進んで、ワーズワスは外来種の植林が地域の生態系を乱すという観点から批判する。今日のエコロジー的観点から特筆すべき、その他のワーズワス独自の主張としては、湖水地方に多くみられる小さい湖(turn)が地域で果たしている役割を観察して彼がエコシステムの原理に気づいている点と、自然景観を国民の共有財産であるとしてその保護を訴えている点が注目される。『湖水地方案内』については他のところで詳しく取

り上げたので、ここではナショナル・トラストや国立公園の設置のための理論的基盤の先駆けとなった一文を引用するとどめたい。⁷ワーズワスは『湖水地方案内』の結論部の最後で、一部の富裕層によって景観のよい土地の全てが買い占められてしまうのではないかという危惧を表明した後、全ての人々が自然を見る正当な目を持てば問題は起こらないとして、次のようにガイドを締めくくる。

In this wish the author will be joined by persons of pure taste throughout the whole island, who, by their visits (often repeated) to the Lakes in the North of England, testify that they deem the district a sort of national property, in which every man has a right and interest who has an eye to perceive and a heart to enjoy. (Wordsworth 91-92)

土地は個人所有が前提であったこの時代、地域の景観は「国民全体の財産である」という主張は極めて斬新なものであったと言えるだろう。

この後、19世紀後半以降のガイドブックからは、環境保護の実践が進み始めた様子を知ることができる。いくつか例を挙げると、1880年に *Thorough Guide Series* の最初として出版され、今日なお版を重ねているバドリー (M. J. B. Baddeley) のガイドブックは、自然環境の保護という目標を前面に出して書かれている。著者はのちに触れる湖水地方保護協会 (Lake District Defense Society) の当初からの重要なメンバーで、自らの所属するこの協会の誕生や活動内容の宣伝が序文で行われ、萌芽期の保護活動の詳細を知ることができる。また、1952年に第4版が出た『イギリス湖水地方』で、著者であるナショナル・トラストのトンブソン (Bruce Thompson) は、早くも車による公害やゴミの深刻さに言及しているが、これは戦後に入って観光と環境の問題が現代の局面に入ったことを物語っている。

5

以上、18世紀から19世紀の前半にかけて環境保護の理念が形成されていったプロセスが、湖水地方のトラヴェル・ライティングなどの文献の中に読み取れることを確認した。それでは、バドリーやトンブソンのガイドブックのところで一瞥した、その理念に基づいた環境保護活動の実践はどのように展開したのか。

最初の実践例としては、すでに触れたワーズワスによるケンダル—ウィンダーミア間の鉄道敷設反対運動を忘れてはならないが、その挫折の後、鉄道によって向上した利便性は19世紀後半にはいとウィンダーミア湖東岸で大規模なホテル・別荘建設やその周囲の装

飾植林のラッシュを招く。ワーズワスの反対運動から30年余りを経た1876年には、湖水地方中心の町アンブルサイド (Ambleside) を通って北部の中心地ケズウィック (Keswick) へと向かう鉄道の延長案が現れるが、ラスキン (John Ruskin) やローンズリー (Hardwicke Rawnsley) らが結束して阻止し、それが大規模な環境保護運動に膨れ上がってゆくことになる。⁸

19世紀後半にはいつての環境破壊の事例として、もう一つ注目しておかなければならないのが、同じ1876年ごろに持ち上がった、大都市マンチェスターの住民に水を供給するためのサールミア (Thirlmere) 湖の大規模な拡張計画である。これには、環境保護組織だけではなく新聞などもこぞって反対運動を行ったが、結局この計画は実行され、湖水面は約10m上昇して湖岸近くの家々は教会と共に湖底に沈み、ワーズワスらが賞賛した湖周囲の景観は全く変わってしまった。しかし、反対運動は必ずしも無駄とは言えず、恒久的な環境保護組織の必要性が認識され、そこからローンズリーらの手によって湖水地方保護協会が設立されることによって、この組織がケズウィックからホニスター (Honister) やエナデイル (Ennerdale) へ延びる北部での鉄道敷設計画を阻止することになってゆく。しかし、この組織の会員の90%はロンドンなどに住む地域外の住民であったことは、未だ環境保護活動が教育のある一部の中産階級のものであったことを物語っていると言えるだろう。

1895年になると、この湖水地方保護協会の支援もあってローンズリーらによってナショナル・トラストが創設され、『ピーター・ラビットのお話』 (*The Tale of Peter Rabbit*) の作者であるベアトリクス・ポター (Beatrix Potter) らの賛同によってこの運動が拡大していったことはよく知られているところである。今日では、保護のためにナショナル・トラストが獲得した土地は、湖水地方全体の25%にもものぼる。

20世紀にはいつての最大の問題は、車公害である。ウィンダーミアで鉄道が止まってしまったために、今日では自家用車で来るツーリストの割合は89%と非常に高く、車による大気汚染や一部道路の渋滞の問題が深刻になっているが、それは第1次大戦前に早くも始まっていたのである。近代化に伴って増大する環境破壊の危機に対抗するため、1934年には湖水地方友の会 (Friends of the Lake District) が設立され、この頃から、敵対するものは個人や私企業から官僚主義に変わって行く。そして、第2次大戦後の1951年には、多くの活動家が協力して湖水地方にイギリス初の国立公園が誕生することになる。

6

現在の湖水地方観光の形態は、エコ・ツーリズムというよりも、20世紀末以降、できるだけ自然環境や地

域のコミュニティを現状維持する努力が行われてきていることから、サステイナブル・ツーリズムと呼ぶ方がより適切かと思われる。湖水地方の観光産業においては、新しい建築物が建てられないなどの厳しい規制のために大規模業者の参入が難しく、地元の小規模な観光業者が殆どで、観光収益が主として地域住民に落ちるなどのいくつかの点はエコ・ツーリズムの要件に合致しているが、そもそも守るべき「手つかずの自然」は湖水地方にはあまり残っていない(この点は、エコ・ツーリズムの定義にもよる)。

サステイナビリティを目指す様々な対策は、主に国立公園(The Lake District National Park Authority、通称LDPA)とナショナル・トラストとによって行われている。アメリカなどの国立公園と違い、LDPAが公園内に所有する土地は全体のわずか4%不足である上、予算も多くなく、その直接的な権限は制約されており、LDPAは公園内外の様々な環境保護団体などと連携しながらその活動を行っている。それでも、LDPAによる規制としては、新築建物の原則的禁止、建替の際の建材の制限、道路拡張や看板等の禁止などが挙げられ、他地域と比較すると厳しいものと思われる。また、大気汚染や道路渋滞への対策としては、路線バスの充実、ミニバス・ツアーの奨励、レンタサイクルの積極的導入などに取り組んでマイカーの減少を目指しているが、この点においては大きな成果を上げるまでには至っていない。森林地域では、公園内最大の森林を保有するForest Enterpriseなどと協力し、伐採の制限や木種・地域・方法などの面において植林の管理を行っている。

一方、公園内の約四分の一を所有するナショナル・トラストは、独自の基準や予算によってかなり厳しい規制をその所有地内で行っている。ナショナル・トラストの基本方針は自然環境や文化遺産の現状維持であるが、一方で「国民全体の財産」の公開を目指す姿勢を貫くため、ヒル・トップ(Hill Top)などの人気の高い場所では、公開の原則は譲らないものの細かい入場制限を設けるなど来訪者による影響に細心の注意を払っている。この他、ワイルドライフ・トラストによるbiodiversityの保護など、湖水地方で活動するその他の様々な諸団体や地元行政などによる管理も忘れてはならないだろう。また、民間による環境税とも言うべき環境支援金の導入や賛同業者のリスト作成といった、観光業者側による試みも始まっている。

先ほど、湖水地方の観光はサステイナブル・ツーリズムであると言えたと述べたが、鉄道駅に近いウィングダーミア東岸は観光業者がひしめき合い、ポーネスの港から出る遊覧船を利用するツーリストの数は、イギリス全国の有料の観光施設の利用者数の中で2番目に多く、マス・ツーリズム的な色彩が濃い。従って、ウィングダーミア東岸はある意味で湖水地方観光の中では特

別地域となっている。また、19世紀後半以降、マンチェスターやリバプール、ランカスターといった近隣の大都市からのツーリストは、より近くに来た典型的な大衆観光地であるブラックプールにも振り分けられている。つまり、湖水地方においては、サステイナブル・ツーリズムとマス・ツーリズムとは住み分けがうまく行われていると言ってもよいだろう。

7

最後に、現在の湖水地方ツーリズムが抱えている課題をまとめておきたい。まず、湖水地方は未だ解決すべく残されている、或いは新たに生じてきた環境問題を抱えている。現在の最大の実際的な課題は、やはり鉄道の延長よりも環境保護を優先したため公共交通の便が悪く、様々な努力にも拘わらず、マイカーのツーリストが減らないことであろう。この他、家庭排水などによる湖の水質汚染、モーターボートなどによる湖上交通の危険性、公園内に張り巡らされているパブリック・フットパス、即ち遊歩道の侵食、ロッククライミングなどによる稀少動植物への影響、などを挙げることができる。

次に観光地としてのイメージに関わる問題も挙げておかねばならない。西部の区域外にあって現在は解体中ではあるが、近くに再三、事故を起こす核燃料再処理工場が存在してきたことや、特に北部がイギリス空軍の演習場所にはいつていることなどは、観光地としてマイナス材料であることは間違いない。これらは、環境保護活動のサイドだけでは解決することが難しい問題である。

また、この地域が「環境保護区域」を任じているということは、ここが環境教育を受けたエリートのための観光地であるという批判に繋がることも指摘しておく必要があるだろう。このことは、湖水地方を訪れるツーリスト層の限定に繋がりがねず、実際にウィングダーミア東岸を除くと中産階級の中老年が多いという傾向が見られる。ワーズワスが鉄道敷設に反対した時も、それはすでに湖水地方で休暇を楽しんできた一部の富裕層のために労働者階級を排除するための反対ではないのかという批判の声があった。即ち、環境は誰のものかという問題を考える必要があるのである。

このように様々な問題があるにも拘わらず、近年のテロリズムなどの影響で国外へ出る観光客が減少気味であることも手伝って、湖水地方へのツーリスト数は年々増加の傾向にある。それにも拘わらず、日本では考えられないほど環境保護などに関わる様々な組織が活動する湖水地方の観光と環境保護のバランスは、今後とも試行錯誤を繰り返しながら改善されてゆくものと思われ、我々はそこから学ぶことは少なくないであろう。

Notes

- 1 LDPAの調査によると、湖水地方を訪れるツーリストの目的は1) Landscape, 2) Clean Air, 3) Peace and Quietを楽しむためとなっている。この他、現代の湖水地方ツーリズムに関する統計は、Works Citedに載せたThe Lake District National Park AuthorityのDocumentsなどを参考にした。
- 2 18世紀前半に隆盛したグランド・ツアー(Grand Tour)は、イギリスの上流階級の子弟がスイスやイタリアへ数年間の旅をする習慣を指したが、その大旅行の手土産としてツーリスト達が持ち帰ったクロード・ロランなどのイタリア風景画に触発されて、その風景画に似た風景を楽しむためのツーリズムが国内で起こってきたが、このいわゆるピクチャレスク(picturesque)・ツアーがイギリスの近代ツーリズムの開始である。
- 3 19世紀半ばまでの湖水地方のガイドブックや旅行記などといったトラベル・ライティングのBibliographyをまとめたビクネル(Peter Bicknell)が、その最も早い例としてあげているものは、ジョン・ブラウン(John Brown)の『カンバーランドのケズウィックの湖の描写』(*A Landscape of the Lake at Keswick in Cumberland*, 1767年出版、執筆は1751年)である。これは、個人の私信を需要に応じてガイドブック代わりに出版したもので、ちょうど18世紀半ばからツーリズムが始まったことを示している。
- 4 イギリス全体で見た場合、11世紀に森林率はすでに約20%ならず(推定)、以後、どんどん減少し、20世紀始めには4%にまでなった。(Thomas 193-4)湖水地方の森林も同様の運命を辿ったものと思われる。
- 5 ウーズビ(Ian Ousby)は、ダーヴェント湖のポクリントン島やウィンダーミア湖のベル島などの例を詳しく解説している。(Ousby 160-65)
- 6 マンチェスターからの距離の近さは、この大工業都市に住む労働者階級の週末の娯楽の場所としての役割を湖水地方が求められるということを意味した。現在でも、マンチェスターからウィンダーミアまでは、直通の列車が走っている。
- 7 ワーズワスの『湖水地方案内』について、詳しくは拙稿「ワーズワスの風景観と「多様性」の「調和」—『湖水地方案内』におけるエコロジーの視点—」『比較文化研究』(日本比較文化学会)No.50 (2000年)を参照のこと。
- 8 湖水地方の中央を貫くこの鉄道延長案が挫折した最大の理由は、工事費用と収益性の問題であったという説もある。(Ridley 18-20)

Works Cited

- Baddeley, M. J. B. *The Thorough Guide to the English Lake District*. London, 1880.
- Berry, Geoffrey. and Beard, Geoffrey. *The Lake District: A Century of Conservation*. Edinburgh: J. Bartholomew, 1980.
- Bicknell, Peter. *The Picturesque Scenery of the Lake District 1752-1855: A Bibliographical Study*. Winchester, Hampshire: St Paul's Bibliographies, 1990.

- Brabant, F. G. *The English Lakes*, Rev. Thompson, Bruce. London, 1823.
- Brown, John. *A Description of the Lake at Keswick in Cumberland*. 1770. London: T. Sherlock, 1772.
- Cowper, William. *William Cowper: The Task and Selected Other Poems*. Ed. Sambrook, James. London: Longman, 1994.
- Department of Continuing Education, Lonsdale College, Lancaster University. *People and Landscape in the Lake District*. Lancaster: Lancaster University, 2001.
- Gray, Thomas. *The Poems of Mr. Gray: to which are Prefixed Memoirs of his Life and Writings*. Ed. W. Mason. London: Stonegate, 1775.
- Green, William. *The Tourist's New Guide, Containing a Description of the Lakes, Mountains, and Scenery, in Cumberland, Westmorland, and Lancashire, with Some Account of their Bordering Towns and Villages*. Kendal: R. Lough, 1819.
- Hutchinson, William. *An Excursion to the Lakes in Westmoreland and Cumberland*. London: J. Wilkie, 1774.
- Ousby, Ian. *The Englishman's England: Taste, Travel and the Rise of Tourism*. Cambridge: Cambridge University Press, 1990.
- Ratcliffe, Derek. *Lakeland: The Wildlife of Cumbria*. London: HarperCollins, 2002.
- Ridley, Rosamund. "Too Many Tourists? The Ambleside Railway Bill Reconsidered". *Armitt: Journal of the Friends of the Armitt Trust, Ambleside*. Vol. 1 No. 2. Spring 2003.
- Thomas, Keith. *Man and the Natural World: Changing Attitudes in England 1500-1800*. Oxford: Oxford University Press, 1983.
- Wordsworth, William. *Guide to the Lakes. The Fifth Edition*. Ed. E. de Selincourt. 1835. Oxford: Oxford University Press, 1977.
- Wyatt, John. *The Lake District National Park*. Exeter: Webb & Bower, 1987.

Conflict Factsheet. 01 Sept. 2005. The Lake District National Park Authority. 2 Oct. 2007. <<http://www.lake-district.gov.uk/lake-district-docs95/factsheets.conflicts.pdf>>

National Park in Figures Factsheet. 01 Sept. 2003. The Lake District National Park Authority. 2 Oct. 2007. <http://www.lake-district.gov.uk/lake-district-docs95/factsheets.national_park_in_figures.2003_update.pdf>

Tourism Factsheet. 01 Sept. 2005. The Lake District National Park Authority. 2 Oct. 2007. <<http://www.lake-district.gov.uk/lake-district-docs95/factsheets.tourism.pdf>>